文化史料館だより

Vol.1　2024 年 3 月

継鹿尾山図 (部分)　1930 年　吉田初三郎筆　継鹿尾山寂光院蔵

犬山市指定文化財に登録されている「継鹿尾山図」は、縦 96cm、幅 322.5cm にもなる巨大な原画で、継鹿尾山のふもとで画業を営んだ鳥瞰図絵師・吉田初三郎が昭和 5 年（1930）に寂光院の聖徳殿竣工祝いに献納したものです。この作品の構図は、初三郎が独自に考案した「初三郎式鳥瞰図」の特徴がよく分かるもので、中央にメインとなる建物を大きく目立つように描き、木曽川を湾曲させることで遥か遠くの景色まで一枚の画面に収めてしまうという大胆なデフォルメでありながら、流域に立ち並ぶ街並みや名所の書き込みは仔細です。さらに、縦横無尽に見える通りや路線も、指で辿り歩いていけば目的の名所に辿り着くことができます。

この魅力的な特徴を持つ観光案内図が日本全国で人気を博し、大正から昭和初期の観光ブームを一層盛り上げたことがうかがえます。

（企画展「吉田初三郎来犬 100 周年記念企画展　犬山名所案内―初三郎と観光―」にて展示）

吉田初三郎来犬 100 周年記念企画展
犬山名所案内ー吉田初三郎と観光ー

会期：2023 年 4 月 28 日（金）ー6 月 5 日（月）

令和 5 年（2023）は吉田初三郎来犬 100 周年に当たるため、これを記念して犬山市文化史料館と公益財団法人犬山城白帝文庫の共催で「吉田初三郎来犬 100 周年記念企画展　犬山名所案内ー初三郎と観光ー」を開催しました。木曽川中流域にあたる日本ラインの姿を多く描いた初三郎の鳥瞰図や風景画は鮮やかで美しく、昭和初期の観光ブームに沸く街並みの様相を鮮明に伝えています。本展では吉田初三郎の作品を所蔵する方々のご協力を得て、鳥瞰図のほか雑誌やポストカード、当時犬山で経営されていた料亭の御膳や掛軸など合計 80 点の資料を展示しました。

大正時代の犬山観光

大正元年（1912）8 月、名古屋電気鉄道（後の名古屋鉄道）によって岩倉ー犬山間が開通しました。開通当時、電車内は常に満員で駅前は多くの人で賑わい、不老の滝・犬山城・寂光院・瑞泉寺を訪れ、犬山焼・木曽川の鮎・風景葉書などの土産物の売れ行きも良く、鵜飼見物を終えても 23 時 25 分発の最終電車で帰宅、あるいは宿泊する客もあり、とにかく活動的な犬山になったと伝わっています。

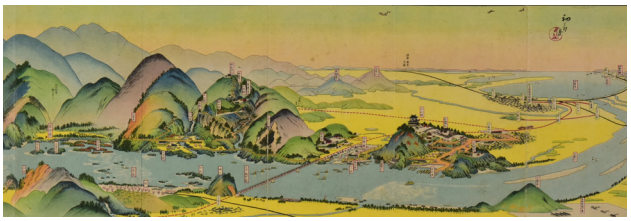
「雄大なる日本ライン　白帝城と犬山橋」

大正 2 年（1913）には志賀重昂が木曽川の風景を高く評価し、一躍「日本ライン」の名前も広まり、大正 11 年（1922）頃に木曽川の急流や奇岩などを船から楽しむ「ライン下り」が始まったといわれています。

初三郎が犬山にやってきた

初三郎が初めて犬山の地を訪れたのは、大正 12 年（1923）5 月のことでした。中部の鉄道関係者が集う懇話会に出席した初三郎は、当時名古屋鉄道常務（後の社長）であった上遠野富之助らの勧めと案内を受けて犬山城下と日本ラインを遊覧します。しかし、同年 9 月 1 日の関東大震災で自宅兼画室を失った初三郎は、富之助のはからいで犬山の継鹿尾山麓にあった名鉄の保養地「蘇江倶楽部」を仮の拠点にして、震災の 2 週間後の 9 月 15 日には「天下之絶勝日本ライン名所図絵」を発行しています。この後、約 13 年に渡って犬山と日本ラインの名を全国に広め、観光開発に尽力しました。

吉田初三郎（1884 ～ 1955）



「天下之絶勝　日本ライン名所図絵」部分
1923 年　吉田初三郎画

初三郎と日本一桃太郎会

犬山栗栖地区に「桃太郎神社」が創建されたのは昭和 5 年（1930）のことで、この創建には初三郎が深く関わっていました。

初三郎は、栗栖地区から対岸の岐阜県坂祝村（現・坂祝町）にかけて桃太郎伝説に関連する地名が多く存在することに気づきました。また、集落が山と山に挟まれた川沿いの小盆地を形成していることに目をつけ、昭和 4 年（1929）に桃太郎伝説の発祥地が犬山であることを『桃太郎発祥伝説地に関する一考察』にて発表し、自らが会長となり「日本一桃太郎会」を発足しました。その後、栗栖区長らとともに桃山のふもとにあった小さな祠を遷座し、翌 5 年には愛知県社寺兵事課に願い出て正式に「桃太郎神社」が認可されたのです。このことは日本全国に衝撃を与え、各メディアや学者らからの注目を集めました。

「桃太郎発祥伝説地に関する一考察」
1929 年　吉田初三郎著

初三郎が犬山を去ったあと・・・

昭和 11 年（1936）、初三郎は犬山を離れ、青森県種差海岸へと拠点を移しました。

昭和 12 年（1937）に盧溝橋事件が発生し、昭和 15 年（1940）頃には日本各地の名所や都市部を緻密に描いた鳥瞰図がスパイ行為に利用されることを危ぶんだ軍による取り締まりが厳しくなったため、初三郎は絵葉書などの制作に取り組みました。

初三郎が去ったあと、犬山には観光社の主筆であり、長年初三郎の弟子として踏査に連れ立った稲垣満一郎（木兆庵）が残りました。満一郎は、大正 12 年に初三郎が初めて日本ラインの踏査写生に訪れた際に随行した二人の弟子のうちの一人で、初三郎退去後も犬山町や桃太郎神社、その他飛騨や知多といった近隣の観光案内図などを出版し続けました。

「日本ラインと犬山町」
1934 年　稲垣満一郎画

企画展を終えて

この度開催した「犬山名所案内ー初三郎と観光ー」は、ゴールデンウィーク期間を挟んだ 39 日間で 8,508 人の来館者に観覧いただきました。鳥瞰図の大家である吉田初三郎が犬山で活動していたことを初めて知ったという声も少なくありませんでした。また、初公開となる屏風絵「犬山之春」「蘇川之秋」（犬山城白帝文庫蔵）を目当てに、北は青森、南は福岡からも来場いただいており、初三郎に対する注目度の高さを改めて感じた次第です。

作品の所蔵者や昭和時代の犬山を知る方々の多大なるご協力のもと、かつて犬山の地域住人らとともに日本ラインの観光開発に深く関わり、宣揚に奮闘した一人の画家がいたことを、企画展を通じて知っていただけたことは何よりの幸いです。

初公開となる屏風絵の展示解説風景

現在の日本ライン
（岐阜県鵜沼側から見た犬山栗栖地区のあたり）

村瀬太乙生誕 220 周年記念企画展

犬山の太乙先生

会期：2023 年 11 月 23 日（木・祝）－2024 年 1 月 9 日（火）

村瀬太乙は儒学者として犬山城主成瀬家に仕え、多くの後進を育てました。また、飄逸とした詩書画を数多く残しています。令和 5 年（2023）は太乙の生誕 220 周年に当たり、犬山市文化史料館ではそれを記念して企画展を開催しました。太乙の独特な筆致で描かれた作品や成瀬家家臣時代の人事記録書など計 33 点の資料を展示しました。

太乙の略歴と家臣としての働き

村瀬太乙（1803 ～ 1881）

享和 3 年（1803）に美濃武儀郡上有知村（現岐阜県美濃市）に生まれた太乙（本名泰一）は、幼い頃から勉学にはげみ、その才を見込んだ同族で漢学者の村瀬藤城（1791 ～ 1853）の紹介で儒学者頼山陽（1780 ～ 1832）の弟子となりました。頼山陽は京都で塾を開き、多くの弟子を教えていました。それ以外にも武家の歴史を列伝体でまとめた『日本外史』を刊行するなど、歴史家としての一面を持っています。

23 歳の太乙は山陽の下で約 8 年にわたり教えを受けていましたが、師が亡くなると、美濃に戻ることとなりました。その後、35 歳の時に名古屋長島町で塾を開きました。天保 15 年（1844）、42 歳の時に、成瀬家に「御儒者」として登用されます。御儒者とは、成瀬家が設立した学問所において教授として任用するために設けられた役職でした。太乙は登用後、名古屋の成瀬家の学問所（後の要道館）で教鞭を執っていましたが、明治 3 年（1870）に、要道館が犬山の学問所である敬道館と合併すると、名古屋に住んでいた太乙は犬山へ移り住み、亡くなる明治 14 年（1881）まで暮らすこととなりました。

太乙の人事記録については犬山城白帝文庫所蔵の『規式以上勤功伝』と『御藩士勤功伝』に記載されています。それによると太乙は教え方が分かり易いことを評価され、8 代城主成瀬正住から裃が下賜されたことが記されています。

『規式以上勤功伝』　犬山城白帝文庫蔵

太乙は講義に師である頼山陽の『山陽遺稿』に掲載されている漢詩の講釈を行っていたといわれています。この書籍には、文政 9 年（1826）から天保 3 年（1832）の山陽晩年の作品が収められています。この時期は太乙が弟子として過ごした期間とも重なり、制作の経緯や背景などを見ていたと思われます。漢詩の講釈も、生徒が分かりやすいように、詩句の説明を日常的な言葉に置き換えたり、口語や方言を多用して講義を行っていたようです。また、煙草が好きで、講義中であっても煙草を吸い、室内

に紫煙が立ち込めるほどであったそうです。

太乙の作品

太乙は儒学者であり、画家ではありませんでした。そのため特定の師について画技を学ぶことはなかったと考えられます。その作品は極端に省かれた線と薄墨を重ねた濃淡が特長です。

「萬歳楽」は尾張万歳を描いた作品で、扇子を持った太夫と鼓を持った才蔵の二人が掛け合いをしている様子を軽妙な筆致で描いています。

「素袍烏帽是何人
　撃鼓鏗々意始新
　児女群呼万歳楽
　我王正月太平春」と、萬歳の二人の様子と子どもたちが集まってくる正月の風景が詠まれています。

村瀬太乙筆「萬歳楽」

太乙は歴史上の人物を題材とした作品も多く手掛けています。安倍宗任は平安時代中期の武将で、陸奥国の豪族の一人です。陸奥国で反乱を起こした豪族安倍氏と鎮圧のため朝廷から派遣された源頼義との戦いは前九年の役と呼ばれています。戦いに敗れた宗任は都に送られました。都の貴族が出した梅の花に対して和歌を詠み、貴族の軽侮をはね返した話が『平家物語』の中にあります。その場面を題材にした「安倍宗任図」は唇を噛み締め、ぐっと花台上の梅花の枝を睨む宗任の姿に「穹盧猶係百夫望　誇示梅花詰此郎　奴視誰知肉食視　三旬一字答歌香」と添えられています。

村瀬太乙筆「安倍宗任図」

企画展を終えて

本展は 11 月終わりから正月を挟んだ 45 日間の開催で、7,063 人の来館者に観覧していただきました。地元の方や太乙に興味のある方などを中心に多くの方に見ていただけたと思います。作品だけではなく、太乙が成瀬家家臣となった経緯や働きぶりなど新たな一面を紹介することができました。貴重な資料をお貸しいただいた所蔵者の方々には感謝を申し上げます。

展示の様子

文化史料館ワークショップ

文化史料館では、楽しみながら犬山の歴史や文化にふれてもらうため、毎年ワークショップを企画しています。参加者は犬山市民はもちろん市外からも広く募集しています。令和 5 年度は合計２回のワークショップを開催しました。

◆ワークショップ１
「家紋でオリジナル団扇を作ろう」

2023 年 7 月 16 日（日） 参加者 30 人

犬山城主成瀬家と家臣たちの家紋をシールにして、参加者は好きなシールを選び団扇の台紙に貼っていき、オリジナルのミニ団扇を作成しました。事前に募集をしない自由参加で、家族連れや観光者の参加も多く大変盛況でした。参加者からは「成瀬家の家紋を知ることができた」「自分の家の家紋も調べたい」などの声が聞け、この機会に家紋に興味をもってもらうことができました。

◆ワークショップ２
「ミニ掛け軸を作ってみよう」

2023 年 12 月 10 日（日）参加者 5 人

令和 5 年 11 年 23 日～令和 6 年 1 月 9 日開催の「村瀬太乙生誕 220 周年記念企画展　犬山の太乙先生」の関連ワークショップで、館蔵品の日本画や書を本紙の図版にして、参加者には好きな図版と掛け軸を表装する色和紙を選んでもらい、ミニ掛け軸を作成しました。小学校４年生以上を対象とした事前参加申込にしました。参加者は成人女性が多く、「自分好みの配色の掛け軸ができた」「今まで何気なく見ていた掛け軸の知識を知ることができた」などの感想を聞くことができました。

犬山市文化史料館（城とまちミュージアム）

〒484-0082　愛知県犬山市大字犬山字北古券 8　TEL /FAX 0568-62-4802

開 館 時 間：　9：00 ～ 17：00（最終入館 16：30）

休　館　日：　12 月 29 日～ 12 月 31 日　※展示替えやメンテナンス時の臨時休館あり

料　　金：　一般 300 円（中学生以下無料）

※「IMASEN 犬山からくりミュージアム　玉屋庄兵衛工房」との共通券

団体（30 名以上）240 円

犬山城下町周遊券 760 円（犬山城・城とまちミュージアム

・IMASEN 犬山からくりミュージアム　玉屋庄兵衛工房・どんでん館の共通券）